

第廿七回平成六年七月二日・岸本町公民館郷土史教室

歴史探訪解説

内藤宮司

山本篤行氏

中曾他。



上下豊臣公御寄附  
三番雙翁面



# 八幡様と銘 紀朝臣河岡山城守久貞公

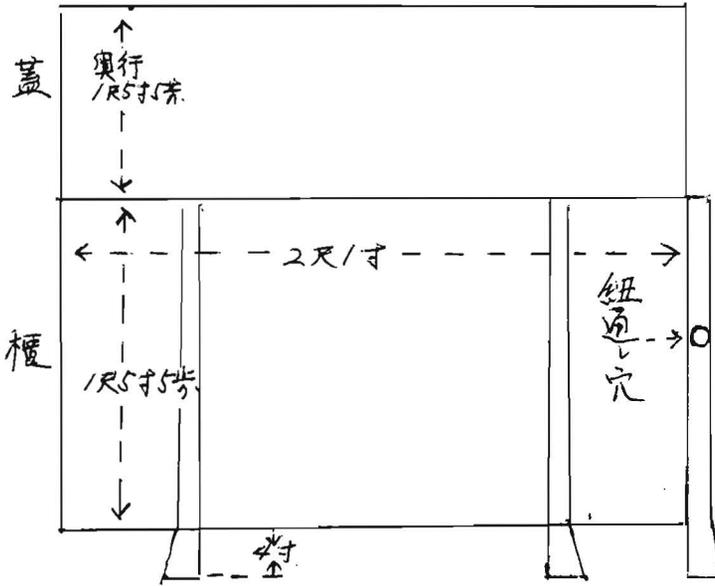
「当社は平安時代・紀氏の氏神様、故鳥居が坂中に向」

奉納戦勝祈願・銘永祿十年の鎧櫃



八幡神社

鎧櫃の寸法

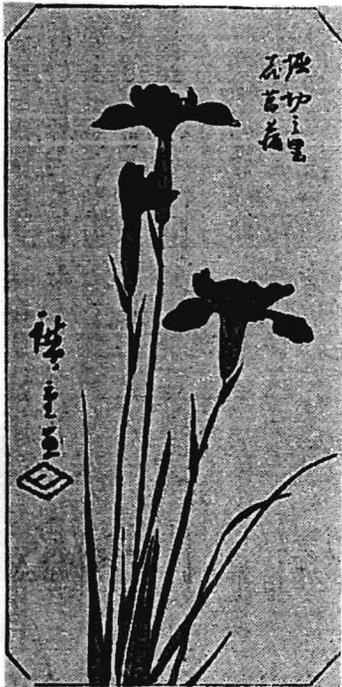


奉納の由来

この鎧櫃は平成三年、銘のある事が発見され、銘に「永祿十年・紀朝臣河岡山城守久貞」とあり。現山本篤行家と判明し今回の運びと成った次第です。四二七年前の縁(言え)を思い、今後そうした物語と共に、当宮え末長く伝えられん事を願望するもので有ります。

岸本町公民館郷土史教室

会長 中曾治雄



# ☆ 八幡宮之鎧櫃

外箱・平成六年新調

1 鎧櫃(よろいびつ) 銘文、『奉納八幡大神宮・河岡山城守・永禄十年(二五六七)・紀朝臣久貞』と朱漆で書いてある。

2 因伯大年史記載、永禄五年の項に『永禄年中甲賀山城守久具会見郡川岡村に在城す』とある。

3 当家菩提寺伝、山本家は、旧紀姓。寺は当時現墓地の隣にあって、字名も寺屋敷。当城が現在の妙本寺の地であった由。(妙本寺住職談)

4 鎧櫃造は、松材が使用され表面は黒漆が塗られ、各く継ぎ目等漆布張りがされ、両横の紐通し穴が大分、大きくなつて使用された痕が窺はれ実戦を物語っている。

5 当家過去帳、過去帳は銀色仕上げの立派なもので、煤と銀錆びで黒ずみ折り目は切れ、当時のよすがと時代を忍ばせる。が過去帳をある先生と看ると、『慶安三年六月廿六日・円了信士兵木次衛門父・寛永十五卯四月出生上新印伊達氏・妙法院常連より山崎掃部頭、家人聳二被

参山崎元祖也』と書かれている。

推

出

(江戸初期屋号を山本が明治以後は姓に使用か)

永禄年間(二五六八、二五六七)の名は、因伯史の名と、鎧櫃名は同一人で本が誤り、貞を具につくられた様に看える。過去帳の、円了信士、慶安三年(二六五〇)没は石塔もあり、年代を思うと、親が久貞、その娘婿が、山崎掃部頭同兵木次衛門養子で、山崎姓の始である。

当時過渡期を反映した呼び名で、掃部頭は河岡城主子孫のなごりで、慶安当時は兵木次衛門と云った。

その為過去帳に前後して書かれている。又いつ頃か没年と生れ年を別々にして、二霊作り書き込こんである(兵木は他の例、兵主に同じ)。円了信士の追院が妙法院常連で当家の例からして妙法院常連圓了信士らしい。

墓地に不明の大五輪が多分、紀朝臣河岡山城守久貞公に思える。(平安時代紀兵の兵神八幡宮建立に因る)

『紀朝臣久貞』が当八幡宮に『出陣戦勝祈願』をし戦勝帰宅の為に『永禄十年』奉納の由。当時そうした同例が行われていたと謂れる。

(中曾平成六年調)

神 祇 神 靈 位

内藤前宦兵衛藤原綱宗 同妻位知 内藤外記 靈璽

内藤前宦右衛門藤原綱只 同妻位知 内藤性 靈璽

内藤前近江守藤原綱廣 同妻位知 内藤性 靈璽

内藤前中書府藤原綱次 同妻位知 内藤政之丞 靈璽

内藤前中務藤原綱壽 同妻位知 内藤古免 靈璽

内藤前右京允藤原綱重 同妻位知 内藤際 靈璽

内藤前伊豆守藤原壽長 同妻位知 内藤内藤竹次郎 靈璽

内藤前舍人 藤原壽職 同妻位知 内藤皆 靈璽

内藤前近江守藤原壽吉 同妻位知 内藤樽 靈璽

内藤前遠江守藤原壽常 同妻位知 文化二丑四月十六日 寛政三亥十二月十四日 内藤門多綱富 靈璽

内藤前藏人頭藤原綱壽 同妻位知 文政十三寅九月廿七日 拾三年九月十五日 享和元西三月廿日 内藤直代 靈璽

内藤前佐渡守藤原綱長 同妻位知 行年七十二才 天保二卯七月廿八日

内藤前四亥八月十八日 同妻位知 嘉永六丑七月十九日

内藤前内藤現采女 同妻位知 文久二戌十一月廿三日 元治元年子五月十五日 内藤隼人藤原視 靈璽

神道葬祭内藤現采女 神道葬祭 内藤縫之内 靈璽

神道葬祭 行年六十三才 行年二十一才

内藤社家の歴代

上記が和紙に書かれ掛け軸に表装され、歴代がお祭りされたらしく黒く煤け、写真撮ったが出ないため判読し活字にする。

八幡神社棟札・米子市東八幡鎮座・徳院長谷川勝馬氏昭和三十四年刊之写

遷宮月日

社 家

鑿取

帶頭

大庄屋栗原庄屋

大工・木挽

西曆

1、書上帳記載の棟札

八幡大神上葺

(一一二)

大永二年月日不詳

八幡宮建立

(一四八九)

明徳七年十一月廿日

八幡宮修宮

(一五七四)

大正二・四・吉

八幡宮建立

(一五八九)

2、現存せし主要な棟札

寛永十一・八・十一

八幡三社

神主内藤近江守綱広

大工 能間三郎衛門會次

(一六三三)

再建

同笛中務郷綱壽

次郎右衛門尉同三十五人

承応二・八・一

八幡宮

神主内藤中務少口綱壽

大工 佐藤六左衛門

(一六五三)

再興

同笛右京亮綱重

延宝元・九・十三

八幡太神

社司内藤右京亮

大工 欠 名

(一六七三)

造宮

祢宜為田采女

元禄七・九・吉

正八幡宮

社司内藤伊豆守壽長

大庄屋仲田与市兵衛

大工 渡辺伊兵衛

(一六九四)

造宮

祢宜住田采女

正徳五・六・廿七

正八幡宮

神主内藤治部壽長

大工 渡辺伊兵衛正家

(一七一五)

造宮

祢宜住田源之丞次正

元文三・二・吉

八幡太神宮

神主内藤舍人壽職

惣作舞生田与吉・安藤善左衛門

大庄屋深田三郎左衛門

大工 渡辺伊兵衛家次

(一七三八)

修造

祢宜住田巖後正家

宝曆五・六・廿四

八幡太神宮

神主内藤市良壽常

後藤五左衛門

大庄屋生田兵左衛門

大工 弓ヶ浜・欠名

(一七五五)

修宮

祢宜住田友之進

明和八・四・十五

八幡太神宮

神主内藤遠江守壽常

田川伝右衛門湯原定吉

大庄屋八田兵左衛門

頭取大工小野吉持七郎同馬場黒本左衛門

<p>修宮 祢宜住田齋</p>	<p>宗旨・妹尾伊右衛門 屋根葺 鳥取 清左衛門 (一七七一)</p>
<p>安永十・三・廿一 八幡太神宮 修宮 祢宜住田齋正郷</p>	<p>宗旨・内藤壽慶 大庄屋・八田弥兵衛 宗旨・瀬尾久左衛門 頭取大工馬場・黒木伊兵衛 屋根屋頭取・岩崎半七 (一七八二)</p>
<p>寛政十一・三・廿四 八幡太神宮 修宮 大宮司内藤 右同 大宮司内藤佐渡守綱長</p>	<p>宗旨・内藤壽興 大庄屋八田兵左衛門 宗旨・深田和次郎 大工頭取石井・齋米和七 屋根屋天方・上田嘉助 (一七九九)</p>
<p>文化十三・三・廿九 八幡太神宮 修宮 大宮司内藤 右同 祢宜住田主水正孝</p>	<p>宗旨・内藤壽興 大庄屋・ 右同 宗旨・ 右同 大工頭取・清水川・大塚儀殿外四名 屋根屋頭・殿司内・広三郎 (一八一六)</p>
<p>天保十三・三・廿四 八幡太神宮 再建 大宮司内藤佐渡守綱長 同・内藤縫殿介綱幸 祢宜・住田近江德義</p>	<p>宗旨・門脇重矩 大庄屋八田弥兵衛 大工後見・別所村定吉同三崎村瀬助大工棟梁以下八名 木挽・六名檢皮・二名 (一八四二)</p>
<p>慶応二・三・十二 八幡太神宮 修造 内藤志摩守綱幸 内藤光之介綱行 祢宜住田近江德義</p>	<p>同・佐々木出羽喜隆 大庄屋・山根作兵衛 大工後見市部村幸藏・棟梁水浜村常左衛門外七名 木挽後見馬場村友助外十名 (一八六六)</p>
<p>明治廿六・十二・九 八幡神社 屋根替 祠掌・住田正雄 同・永奈政一 同・内藤章</p>	<p>同・内藤綱泰 同・永奈政一 同・内藤章 大工棟梁八幡住田作蔵・同吉長杉本文太郎 後見・岸本蓋田又三郎 (一八九三)</p>
<p>大正十五・四・十四 八幡神社 改築 社司・内藤齋 社掌・高橋五穂</p>	<p>春日村長 福中正男 請負者・大森泰次郎 大工・石原虎次郎 (一九二六)</p>
<p>昭和三・四・廿二 八幡神社 屋根替 社司・内藤齋 社掌・高橋五穂</p>	<p>春日村長 田中榮吉 請負者・大工大谷峰治・同田子清太郎・同石指繁雄 檢皮・加川敏徳 (一九二八)</p>
<p>昭和卅四・十・十 八幡神社 屋根替 宮司・内藤運民 高橋重雄</p>	<p>同・八幡相見忠一郎 同・八幡相見忠一郎 同・八幡相見忠一郎 同・八幡相見忠一郎 (一九五九)</p>

3、明和八年（慶応二年）までの遷宮役員

遷宮年月日	根取	宮庄屋	世請人	見禮役	手伝
明和八・四・十五	宮庄屋	仲田治良左衛門	同須山弥兵衛友益	同田川伝右衛門	
安永十・三・廿一	宮庄屋	篠村六良治	同八田為三郎善勝	同長谷川文蔵	
寛政十一・三・廿四	宮庄屋	篠村六良治広勝	同後藤重兵衛常清	同生田宗治郎辰苗	世話人 田川兵助広綱
文化八・三・吉	宮庄屋・新庄	湯原定吉	同新庄湯原林兵衛	同吉長金沢徳治郎	
文化十三・三・廿九	宮庄屋金田徳治郎	同湯原林兵衛常尚	同中皆彦五郎興昌	見禮役湯原定吉	同潮文蔵
天保十三・三・廿四	根取八田兵左衛門直祝	宮庄屋末次定四郎源久	同仲田兵右衛門敬忠	手伝長左衛門兼欣	
慶応二・三・十二	宮庄屋	湯原忠左衛門幸成	同清郷文蔵正貞	手伝八幡村重左衛門	同新庄安右衛門 同大寺吉左衛門
八幡村	須山兼助	須山兼助	孫右衛門	重藏	重右衛門
八幡新庄	湯原伊右衛門	湯原六良兵衛	六良兵衛	定吉	文平
四口市村	高田与兵衛	内藤孫兵衛	孫兵衛	孫兵衛	重左衛門
山田場村	稲田善助	稲田彦助	治左衛門	治左衛門	孫右衛門
寺分村	市右衛門	蔵右衛門	新兵衛	寺領 仁兵衛	仁兵衛
殿河内村	欠山儀助	篠村六良治	六良治	外右衛門	甚蔵
大寺村	長谷川忠蔵	長谷川文蔵	和兵治	和平	唯吉
坂中村	奥田政右衛門	中皆國右衛門	國右衛門	彦五郎	彦五郎
長者原					儀三郎
岩屋谷村	奥田源次郎	井右衛門	仙治郎	源助	源輔
小町村	平左衛門	三郎右衛門	三郎右衛門	三郎右衛門	六郎左衛門
小野村	善右衛門	源蔵	孫兵衛	孫兵衛	孫兵衛
					林左衛門
					吉左衛門
					吉持吉十郎
					吉良右衛門
					友左衛門
					保左衛門
					倉右衛門
					三良左衛門
					重平
					定四郎
					四良左衛門

八馬場村	水浜村	遠藤村	吉長村	押山村	立岩村	鶴田村	別所村	金廻村
田川伝右衛門	清右衛門	重右衛門	忠心村利助	与一兵衛	兵右衛門	治兵右衛門	平治郎	
相見兵三郎	林右衛門	助右衛門	回利助	与一兵衛	兵右衛門	与三治	源右衛門	
藤右衛門	多平	利右衛門	吉長村徳治郎	三郎右衛門	安右衛門	文佐衛門	平治	
藤左衛門	多兵衛	治左衛門	徳治郎	定吉	源左衛門	弥吉	平治	
仁兵衛	多兵衛	次左衛門	徳治郎	定吉	源左衛門	源左衛門	甚蔵	
才吉	源右衛門	源右衛門	茂助	丈助	与三郎	次左衛門	佐平	
勝右衛門	多兵衛	友左衛門	藤蔵	広三郎	弥三右衛門	龜右衛門	林右衛門	妹尾清吉



現今、灯台建設問題で揺れる伯耆天満山城では、急に実施された調査でいくつが新発見が提供された。以下、その重要性を探る前に、城のおおよその変遷をたどっておく。

城の起源は、少なくとも文字資料からは拾えない。史料上の初見は、尼子氏によるいわゆる「大永の五月崩れ」とされている。これは、大永四年(一五二四)五月に惹起(じゃっき)された、尼子氏の伯耆に対する一大侵攻事件として有名である。城は、この時、尼子軍によって陥落したと伝えられている。この争乱を書き留める歴史的な文獻類は、しかし当時の主を明らかにしていない。

もっとも、この事件については疑問とするところが多々あって、直ちに信用するわけにはいかない。城が尼子氏によって攻略されたか否かだけでなく、当該期に城が存在していた保証も全くないのである。一等史料に従う限り、城の初見は永祿三年(一五六〇)前後である。

尼子氏との確執が決定的となった安芸毛利氏は、本格的な攻撃に先立って周辺に着々と足場を築いていった。具体的には、尼子氏にあって伯耆を追われた園原を陰に陽に支援したり、尼子氏を見限りつつあった伯耆衆を招き寄せたものであった。永祿二年(一五五九)冬、

尼子氏の衝撃は大きく、同六年(一五六三)暮れに、当主晴久を失ったからは衰退の一途をたどっていった。尼子方の復讐してしまっただけでなく、肝煎(きもいり)で整備された城がそのまま反旗を掲げたのである。毛利元就は見苦しいまでに狼狽(ろうたい)するが、果たせるかな、この以後、河内・尾高城の毛利軍は再三にわたって危険にさらされるのである。

# 探訪 山陰の中世

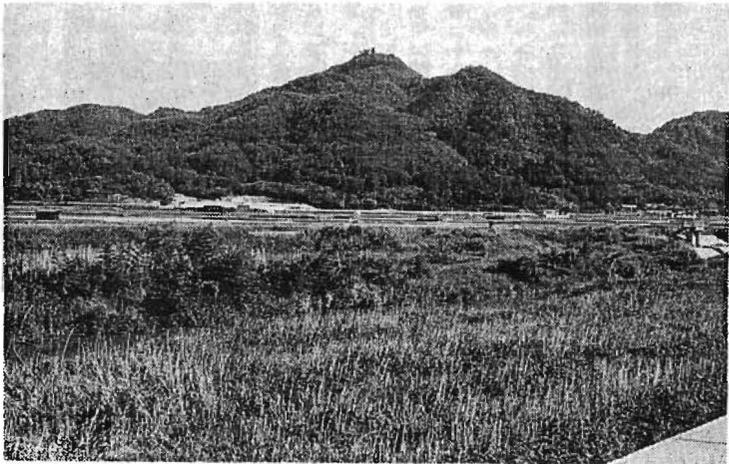
鳥取編

◇46◇

翌六年春、天満山城は城の一部を焼き打ちされ、伸

## 伯耆天満山城

### 尼子、毛利氏が争奪合戦



北西から見た天満山城



天満山城主白野孫左衛門、生山城主山名藤幸、河内城主河内久良らが相次いで毛利陣営に走った。毛利氏はこれを受けて翌年春、備後神辺の杉原盛重を河内城に派遣、天満山城の増強に乗り出した。程度や実態は不明だが、来るべき尼子との山・長台寺・江尾の各城が尼子方の城にも動揺を与え

た。一方、格好の足場を確保された毛利氏の戦略は着実に実を結び、同年夏には園原に流れてきた村上氏な富田に去っている。毛利氏はこの失敗に懲りて杉原と行動を共にしたらしい。利氏は宿敵羽柴秀吉との和平交渉で窮乏としていた。みとする天満山要害の落城、上機能を失ったものと思われる。

(城郭研究者・高橋正弘)

た。長台寺は間もなく降伏。思われる。杉原時代にも相討に腰を上げたのである。毛利氏は、分国諸將を大動員し西伯耆にたれこんだ。この時景盛は、要害天満山にも兵員を配置し、自らは尾高に籠城(ろうじょう)して待機した。毛利軍の迅速な行動や、天満山の陥落は、尼子軍はかたがた天満山に攻撃を実施したらしい。最終的に城が破却されたのは、元和一國一城令(一六一七)の時であろうが、毛利氏は天満山を放棄しな



宛行給知之事、相見郡於八幡之内三拾五貫目相斗候、坪付有別紙出忠節者、弥可加扶持者也、依如件

永祿十年九月十六日

坂中弥六殿

盛重 花押

坂中廃寺 ▶西伯郡岸本町坂長822-1(→p.174, 194)  
▶J R 伯備線岸本駅下車20分

岸本駅から西へ約2km、台地上に坂長(旧坂中)



集落がある。公

民館の横に「紀成森長者之塔」と刻まれた石碑が立ち、前には坂中廃寺の出柄式の塔心礎が中央から二つに割れて残っている。山陰では類例をみない様式である。柱礎や軒九瓦が周辺から出土していて、この一帯が寺院跡であることは確かである。軒九瓦は伯耆国分寺の瓦と類似し、この坂中廃寺の創建は奈良時代後半と考えられる。

奈良時代後半といえ、805(延暦24)年、桓武天皇が病氣治癒の祈禱のため伯耆国から玄賓を招請していることとつながる。玄賓(734-818)は法相宗の高僧で、南都第1の高僧とよばれたが、805年以前に伯耆の山に入った。そして会見郡に阿弥陀寺を建立、伯耆の人々は12町9段40歩の租を施入している。時期的にみて玄賓が伯耆の山にいた時期と坂中廃寺が造営されていた時期とは重なる。阿弥陀寺に施入される租は会見郡衛が管理し郷司(郡司)を通して納入される。つまり郡司が寄付したのである。会見郡衛は坂中廃寺の東、長者屋敷遺跡と推測する説もあり、あるいはこの坂中廃寺を玄賓建立の阿弥陀寺と考えることも可能である。

廃寺跡の石碑の紀成森長者とは、坂中の長者原に居住していたと伝えられる伯耆国会東郡の地主紀成盛のことで、成盛は1172(承安2)年11月、大山権現の3尺(約90cm)の金銅地藏尊像や鉄製厨子を鑄造し、また大山権現堂(大神山神社奥宮)も造営している。

### ◎童子切り安綱

日本の刀剣が直刀から反りのある「日本刀」に移ったのは平安時代とされる。創始者は安綱を最古とする伯耆古鍛冶、いわゆる大原鍛冶とよばれる大原一門である。伯耆での居所は明確でないが、旧会見郡(現西伯郡)の地が有力である。安綱の代表作は童子切り(国宝)とよばれる2尺6寸5分(80.3cm)の名剣である。源頼光が丹波大江山で酒頭童子を切ったという伝説をもっている。源平両家の宝剣とされ、『太平記』にも登場し、のちに信長・秀吉・家康らに伝えられた。伯耆では平安から鎌倉、室町にかけて多くの刀工が続出し、大原・一宮・金市・国延・大坂・津原・楕原・小鴨などで鍛刀している。いっぽう因幡では山城国粟田口派の流れ、景長を始祖とし、景あるいは景長の名を踏襲する因幡小鍛冶派が鎌倉末に知られている。

岸本町公民館郷土史教室・行った歴史探訪目次

第一回昭和六十一年七月十一日

広瀬町富田月山城・講師妹尾豊三郎氏

第二回 同 九月八日

当町・小野小町と越敷山

講師妹尾善夫氏

第三回 同 十月六日

当町真野城について

講師幡原敦夫氏

第四回昭和六十二年四月六日

当町・米子市青木、坂中丹波守弥六

と青木勘解由・青木城。

説明幡原敦夫・小村明・中曾治雄。

第五回 同 五月二十九日

溝口町山中鹿之介の足跡尋て

講師南波睦人氏

第六回 同 七月十三日

当町・<sup>米子市</sup>新庄・会見町・西伯町・

尼子時代総集一

講師堀田収穂氏・中曾。

第七回 同 九月二十二日

尼子時代最終編

説明野口徳正氏・中曾。

第十五回平成二年三月二十八日 文化講演会と歴史探訪

坂中廃寺と玄寶・久古の牧ノ尾御前

講師 県立青谷高校教諭 小坂博之先生。

第十六回平成二年八月二日

後醍醐天皇の足跡と山陰伝説 上

解説 樫 範之(立花書院)

第十七回平成二年九月二十五日

醍醐天皇の足跡と山陰伝説 中

解説 南波睦人氏・中曾他

第十八回平成三年四月十八日

後醍醐天皇の足跡と山陰伝説 下

解説 伯太町粕原・原本辰男氏

同町母里・名和川修氏

第十九回 同 年八月廿四日

王身代家・中津尾家・と上淀廃寺

解説 中津尾氏 中曾。

第二十回平成四年四月廿一日

名和長年を尋ねて

解説 戸野 博先生 他。

第廿一回 同 年七月廿一日

見出神社と松本家の秘伝・伯耆安綱の碑

解説 松本瑛子氏・神庭信夫氏・中曾。

第八回昭和六十三年三月十四日

当町 渡部大庄屋について

説明幡原敦夫氏・中曾。

第九回昭和六十三年七月二十日

進海陸兵衛尉紀成盛 一

解説 妹尾善夫氏 南波睦人氏 小村氏。

第十回 同 八月二十日

講演会 日野川の転流

講師 能登路定男氏

第十一回 同 年十月三日

進海陸兵衛尉紀成盛二

解説 相見行佳氏 谷本隆道氏 南波睦人氏

第十二回平成元年三月二十四日

佐野川(長者原野井手開き)の一

講師 相見行佳氏 助言者中曾。

第十三回平成元年九月二十日

佐野川(長者原野井手開き)の二

講師 相見先生 助言者中曾。

第十四回 同 十一月六日

岸本要害と悲運の将別所氏

解説 中曾治雄。

第廿二回 同 年十月廿四日

生山城 解説 高橋敦史氏 中曾。

第廿三回平成五年三月廿七日

小野小町と越城山

解説 妹尾善夫氏 幡原敦夫氏 他。

第廿四回 同 年七月三日

大山は現ていた南北朝の跡

斎林原・取尾家 久吉 西古家 真 後藤家

解説 妹尾善夫氏 中曾治雄。

第廿五回 同 年十月二日

南朝の遺臣 長谷部左衛門尉信豊公

元弘三年三月廿九日船上山合戦於戦死三十一歳

解説 長谷部信博宮司・中曾治雄。

第廿六回平成六年三月廿六日

紀氏と安綱同系・安綱蘇る甕

解説 幡原敦夫氏松本氏南波氏中曾氏

平成六年六月

企画編集 中曾治雄

岸本町坂長 066-2157

製本 松本瑛子

# 鎧櫃の外箱を新調

河岡城主の子孫・山本さん

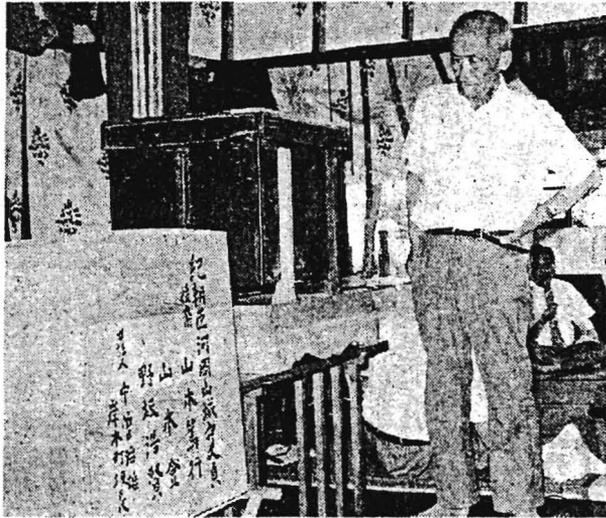
## 八幡神社へ奉納

米 子

永禄十年(一五六七)に死去の兄が鎧櫃を保存する河岡城(米子市)主が鎧櫃の外箱を同神社に奉納した(よろいひつ)を奉納した。

とされる米子市東八幡の八幡神社(内藤和比古宮司)で、城主の子孫に当たる故

・野坂恵美子さん(野坂浩約六〇才、奥行き約五〇才、横賢建設大臣の妻、六月二日)で、「奉納八幡大宮司、河



鎧櫃(中央)と外箱を眺める河岡城守久貞の子孫の山本篤行さん

岡山城守 永禄十年、紀朝臣久貞」と書かれてあることから、河岡城主久貞が八幡神社に奉納したことが判明した。

その後、恵美子さんの実兄である同市河岡の山本篤行さん(七〇才)の過去帳に河岡城主久貞の戒名、円了居士の名前があり、久貞の子孫と判明した。

山本さんは「鎧櫃は四百年以上も経ち、ネズミに食

われたりしてかなり傷んでいた」として鎧櫃のふたなどを一部補修、外箱を新調した。また、恵美子さんは生前、外箱を作って鎧櫃を保存しておかなければいけないと話していたという。

この日は、山本さんのほか西伯郡岸本町公民館郷土史教室(中曾治雄会長、二十三人)も参加して鎧櫃の外箱奉納式典が行われた後、中曾会長の司会で山本家が久貞の子孫に当たる背景などの勉強会を開いた。

山本さんは「鎧櫃の外箱が完成した三十日に野坂さんは建設大臣になられた。何か因縁めいている」と話している。